軽挙観句藻

全

E 32
186

E 32/186.
東京帝國大學圖書之印
B 23475

屠龍之技序

輕擧道人善誹諧十七字之詠。觸於目。感於心者。皆發之於言。其所發者。皆獨笑獨泣獨喜獨悲之所成也。而不知人之聞之者亦與我同笑耶泣耶喜耶悲耶。惟言其所言。發其所發焉耳。道人嘗自謂曰。誹諧體者。昉於唐詩。而和歌效之。今十七詠。蓋其餘流也。故其言不論雅俗。或雜之以土語方言鄙俚之辭。又何門風之有。諺云。可言而不言則腹彭亨。吾則言其可言。發其可發而已。道人可謂風流之巨魁得其髓矣。因題其首。

文化九年壬申十月
江戸鵬齋興
鵬齋

こかねのこま
うくひすハ鳴こもかたし腰瓦
から傘のはねのたくみも柳哉
嵐山の戸奈瀬にをつるやなき哉
うめか香や爰の巨燵も周防この
かけろふや野馬の耳の動く度
ゆめに見し梅や障子の影ほうし
芹喰ふて翼の軽き小鴨かな
雛よりもかしつく人のひゐなかな
花ひと木鞍置馬を蔽しけり
傾廓

夜さくらや宮挑灯の鼻の穴

莩の實の四もたらてや暮遅し

讃戯畫

鶯の身ほし（を）さかさまに初音どん

かはら焼く松のにはひや春の雨

花ひらの山を動すさくらかな

牛ほとの蟻見付たり桃の花

蝶くや獅子のねむりの上を飛

衆徒よ見木葉天狗よ山さくら

連翹の蒼喰ふかかわら鶸

鳥追の昔し相（模）様やうめよ鳥

三月畫

箒木の袷尋る晦日かな

悼米翁老君

聰き人も耳なし山や呼子鳥

船頭も（舟行）象こ成けり夏まつり

なかれゆく椎木屋敷はとゝきす

無同剃髪しける時

よし野よく櫻ん坊の天窓かな

爐に寄れいよらるゝ夜こそ（なり）杜宇

守る人よ枕かそふよ瓜はたけ

居眠を呈つはよさする扇かな

一樹の蔭他生の縁と心大 太
ほとゝきすこれを喰ふか栗の花
飛ふ蝶を喰んとしたる牡丹かな
わか竹の弓にうたるゝそれたち哉
郭公たゝ有明のかゝみたて
晝中よ入梅のしるしや時鳥

達摩の讃

石菖や尻も腐らす石のうへ
脱かへて花見虱よ別れけり
近付の森のあたりやほとゝきす
匡衡か壁をのつから五月あめ
紫陽花や硝子吹きか椽の先
閣暑し舟にもうこくあふき哉
こし〳〵や御袨よ捨る多葉粉入
すゝしさは家隆の歌のしるしなり

かちのおこ

星一ツ殘して落る花火かな

生鮹や納屋か柱の菜蕢俵

明星や沖から戻る雁の行

あゝ欠ひ唐土はてん秋の暮

少年行

飛ふ駕や時雨来る夜の膝頭

こからしや明ゝ木の椌園の竹

河豚喰た日はふくみた心かな

青樓

此年も狐舞せて越へにけり

繪馬かきやくれゆくこしの走筆

遊へ春梅の鼻もの延次第

余處になき箸紙賣りや梅の紋

遠望

散る花を汲とも見へつ苗柄杓

車はと舟押す人や汗（沙）干かた

ほとゝきす手燭よくらき夜の空

空懸明月待君王

今上る客ハ化物ほとゝきす

翌も又こゆる暑さや雲の峯

淺草の富士詣る

これよりして御馬か中か（へしや）羽織不二

あけ笠の級（紐）ゆふくれや夏秡

七里濱にて

浪に立人も馬鹿鳥磯の秋

かひ巻もとられし音の野分哉

後朝

湯豆腐のあわたゝしさよ今朝の霜

出山寺に晋子の發句

碑たつるとて

草埜の今に残るや人の口

告わたる木綿付鳥や年の關

をさかりの雫沓むや梅若し
張子屋も梅は咲たり豆達摩

花街

松は皆人に植たる二日かな
青柳やいなりの額の女文字

春眠

たらぬ夜よ日を足す日有花の雨

米翁老君の三周に

高宗か三年ハはやし桃李
松山の花のけむりや春の風
鏘々錚々金鐵皆鳴

はつ秋や嚬（嗽）茶碗よかねの音

榎島辨才天法樂

名月に松明もたのまぬ岩窟かな
湝音よくれたのもしき紅葉かな

神田明神祭禮

柿賣の迯行かたや猿のたし
上﨟のひとり歩行や月の秋
今下す雁は小梅か柳しま
みの笠も草を踏ぬ野分哉
雲の月見しやそれとも有馬筆
鸂鶒や芥は見へす水のうへ

野路や空月の中なるおみなへし
先ひと筆らしや雁のふみ

傾廓

燈籠も鶪の觜と代りけり
素麺よわたす（せ）る箸や銀河
はつ秋や心に高し空の鳶

琴流君の一周に當給ふ

秋聲

川風の行て歸らぬ綱火かな
蜀黍やさしも隠せし閨の中
蚊の觜にさゝらと言を初けり

紫式部の畫の賛に

明月や硯のうみも外ならす

乞巧奠

牽く牛のはる（な）の穴こ（そ）も星二ツ

猩（狸）の腹鼓の畫よ

うち落せ秋の夜雨のふる尾
野分立つ空やからすの弱法師
臘八や隠者は山よ入るも有り
うね火山耳なしやまや二た時雨
江戸畫圖の冬田や鶴の一蹊
竹取の翁や煤の太郎冠者

もちつきの駒のかしらや杵の先

沾徳か手紙ことくや塩かつは　至日

藪蔭のうめを採るや稲光

みやこどり

伐木丁々

山更よひゝ切る音や秋の風

豆箕の中よ這て居る苐かな

樹の文よ姿見へけり秋の雨

昔みし御花小判やけふのきく

木兎曳きや初笑ひし輩は

舟猿の舳先よさみし九月盡

木槲の照葉見つけし時雨哉

傾廓

君平か占もあたらす大晦日

畫の讃に

かた足はちろり下けたり雪の鷺

餅花や昔なからの箔階子

八橋やなかるゝことしの疊臺

行年や株よかゝる金もかな

江を渡て恵方参やうめ柳

ゆきみそれつもり〳〵て梅花

夜部捨し玉子の売や飛胡蝶

蠶玉を祭捨たる貧家かな

起よ今朝上野の四そ花の雨

初午や犬よ嗅れな此趣向

花礫亭の娘はつ鐵漿に

先ふくむかねは楪はなの春

錢賣の覗て行や朝さくら

上巳

傾城やまつ曲水の椽のね腰

深山木を几帳にのそく櫻哉

雛の花吸ひよ來る夜明かな

多田藥師法樂

是は目の藥よなるか花の雪

皀角よ階子わすれて春の雨

牡丹一輪青竹の筒に
さして送られける時

仲光か討て参しほたんかな

案内子か小便したるわかはかな

ほとゝきすいたき枕に寐たよ哉

もれ出る籠のほたるや夜這星

悼嘉魚

膝抱て誰もう月の空なかめ

山茨や卯の花をそき垣根より

五月雨やいつ見しまゝの淡路島

木髮か湖十と
名改するに

筍やこの百姓も六代め

山樵かきれ口にくしほとゝきす

湯泉に立し人の噂や涼臺

羽をためす乙鳥高し今朝の秋

鵲のはし子呼（なり）ほしの竹

此土手の馬追ひ出や舟かふね

地にあらは二股大根天の川

中秋無月

物干の芒に雨を聞く夜かな

十六宵や去年の日記も雨の事

けふそ知る鶯の愚かりの聲
雁も田に居馴染む頃や十三夜
昏る日を荷ひ戻せよ紅葉賣
いつ月になりて時雨れ松の聲
其以前鮟鱇くひし人の膽
寒菊の葉や山川の魚の鰭
水鳥の脊中を走る霰かな

丙辰　春詞

竹藪にうぐゐす笛も生けり
君か爲まくり手志たり若菜摘
人の日の粥も雪間のわかな哉

鶯は舎那王とのやうめの時
藤房こ正成と花ひとへかな
三味線の名よしをひぬる薺哉

花未開

笑わせて笑ぬ花や車僧
汐干狩比目の裏に歌書ん

草色遙看近却無

何草と見へすに青く野は成ぬ
欵冬の水なふりする夕かな
往昔のお腰かけ石藤のはな
うの花や槙の柱のわれにさせ

鶯の子は宗盛かほとゝぎす

畫賛狂句

彦根侍の口真似して

さして見ろきよやう牡丹のから傘

椎の木かけ

十鳥千句獨吟巻頭

うぐひすよ北野の繪馬かゝりけり

とふ迄を走つけたる春雉哉

乙鳥や汲てはなせし桔槹

ほとゝぎす鳴やうす雲濃紫

魚狗や笹をこもれて水のうへ

田の畔よ居眠る雁や旅つかれ

山陵の吸筒さかす夕かな

木兎も末社の神の頭巾かな

おし鳥のふすまの下や大紅蓮

蒼鷹の拳はなれて江戸の色

夕立や静よ歩行筏さし

緑樹影沈ては

仙薬を魚もなめてや雲の峯

秋既ちかつきふへて螢かり

きぬ〳〵の橋に成たかあの鴉

痳やと云ふ売またぬすけふの月

花方よ團子喰せつ今日のつき

名月やもと塩竈の人通り

印籠の一ッ下るやからす瓜

貝の斑の雀に似たり夜蛤

降り年や初茸賣りか聲の錆

重陽

太刀懸に菊一とふりやけふの床

見劣し人のこゝろや作りきく

冬の野や何を尾花か袖みやけ

見し夢や時雨の松の畫から紙

來ぬ夜鳴く衛や虎か裾模様

俊成卿の畫に

おもふ事言はてたゝにや桐火桶

河人か初七日よ橋場の
保元寺よ参り

松を時雨むかしうき世の鞠目附
仙人の碁盤に向ふ巨燵かな

望白馬津

市人の喧嘩やこし﹅の川向ひ
麓にも手を組む松や師走山
としの菊うち拂ふ袖のほこり哉
行年や何を遣り手か夜念佛

丁丑春興

いく度も清少納言はつかすみ
菜の花や筏落たる道の幅
うくみす(と)そや梅よやとかる鳥ハ皆
のり初る五ッ布團やたから舩
はる雨のふり出す賽や梅二輪
火もらひよ蚫の殼や梅の晝
出代の唇あつき椿かな
欵冬や水のけふりも此ころは
ちり積て山樵か荷や花一朶

却走馬以糞
それの田や屋繪の馬の糞かゝり

更衣

音八か鄽人形も袷かな
待ぬ蚊の聲の高さや杜宇
樹作りか衣かゝけり庭若葉
夏山の火串ハ幗の紙燭かな

杖行のこれも久しきのほり哉

たけかはもうつ蟬も暮や五月雨

はつ秋や寐覺て笛の指遣ひ

七夕の硯に遣ふ楊枝かな

秋にははたへぬと
良經公の御かうたまも

月の鹿ともしの弓や迫來て

黒樂の茶碗の歟やいなひかり

かけ稲を屛風に眠る小鷺哉

寛政九年丁巳十月十八日本願
寺文如上人御参向ありしをり
から御弟子となり頭剃こほ
ちて

遯るへき山ありの實の天窓哉

草の戸や小田の氷のわるゝ音

鴫立澤にて

三千風に見付られけり澤の鴫

箱根湯泉本福住九藏か
もとにこまりて

先むかへ冬の出湯泉のわく火鉢

御關所

冬枯や朴の廣葉を關手形

薩埵峠にて

夜山越す駕の勢や月と不二

降霰玉まく葛の枯葉かな

うつの谷峠にて

あとからも旅僧は来り十團子

汐見の観世音に参り

あとになる潮のおとや松のかせ

十一月十八日京着木屋町にて

布團着て寐て見る山や東山

清水寺に参りて

春待や柳も瀧も御手の糸

戸奈瀬の雪を

山の名にあらしに六の花見哉

朱雀野に日くれて

島原のさらは〳〵や霜の聲

佐谷川にて

水鳥は流るゝ沓や橋の霜

江尻の驛寺尾與右衛門か許

にて

置巨燵浪の闌もり寐て語れ

光廣卿の倭歌によりてなり

十日の夜小舟にこりのり清水

の湊をこへ三穂の明神を遥
拝して絶景言葉につくさ
れす

いつ迄も夢ハ覺るな霜の舟

十二月十四日江都にかへりて
鯛の名もとし白河の旅寐哉
ゆくとしと鶴の歩みや佐谷廻り

戊午春興
うくひすや雲水の井を水かゝみ
塩竈のあたりに煙るやなき哉

千都かのいね
春雨のほろ〳〵和へや御もの棚
鳴かぬ田もなく田も動く蛙哉
水貝の鉢に小島やまつ島や

水無月なかは鉢和百之丞
得道して空阿彌と改吾孀
に下けるに發句遣しける
其夜降山の雪見よ鉢たゝき
はつ秋や夏を見かへる和田峠
夕露や小萩かもとのあそり笘

泰室改名春來

島臺の鶴と成けり茗荷の子
刈除けて雁待つ小田の景色哉
待宵や降出す庭の捨篝
明月や曇なからも無提燈
　晩器改名朝四
いろ鳥の中よよき名を鶫哉
しらきくや籬のうちの羽林軍
龍膽や慈鎮の菊の後よさく
をり屑の堰よかゝるもみちかな
落葉して都の見ゆる庵かな
存義先師十七回忌

ふるこゑを鳴て千鳥の磯めくり
雪おれの雀ありけり園の竹
ゆきの夜や雪車に引せん三布團
　一年好景須君記
口切や南天あかしうめ白し
百雨と書たり年の関手かた
胡麻節を軒端の梅のつほみ哉
はるさめややかるさの鬼も綱か手に
から猫や蝶噛む時の獅子奮迅
人影や月になりゆく夕櫻
三月　豊畫

ゆくはるを小塩の曲せや一と奏

老驥伏櫪而志在千里
烈士暮年而壯心不已

唖壺も四ッ迄たゝく水鶏かな

妹許の櫻煙草や十三夜

鵰の枝踏むおとや冬木たち

庚申春詞

汐擔桶ハ沖のかをりや汲に行

讀抱朴子

首延て霞を呑か嶺のつる

ありと云ふ二王の筆やおほろ月

松を畫に昏行梅や金砂子

はるさめや筏になりぬ竹かへし

朝妻ふねの賛

藤なみや紫さめぬ昔筆

聞そめてなかぬ夜ゆかし鵑

きりはたり提燈持も虫撰み

東陽山

逢ふやいかに夜のにしきの星の竹

紅葉見やこのころ人もふところ手

歳暮

一文の日行千里としのくれ

辛酉春興

今や誹諧蜂の如くに起り
麻のごとくみだれその糸
口をしらす

貞徳も出よ長閑き酉のとし

榎島参詣

さくら貝手ことに拾へ島同者

悼無同

初七日に鼻くそ餅も間にあはす

名月や八聲の鷄の咽のうち

きくの宿碁經見て居る主かな

會式

佛力やまた見ぬ花のよし野紙

門覺上人の
院宣を持來たる處畫たるに

伊豆千鳥その足あとを力かな

李笠翁になろふて

一幅の春掛ものやまとの富士

井の水の淺さふかさを門をしみ

水になる自剣盟や雲のみね

永代橋のもとに銀舫を
あくるとき

さし覗く顔も鷗や五兵衛舟

朝かほや花の底なる蟻ひとつ

新蕎麦のかけ札早し呼子鳥

良夜飄風驟雨

宵寐して雨夜の月ハ夢にみむ

露吸て蟲も千代經ん溪の菊

木白この一周忌よ

ひとめぐり廻りて居るたかへ哉

月の昼うき寐の鳥をかそへみむ

年尾

こしの夜や庭火よ白き犬の皃

植木屋か歳暮の梅のにほひ哉

潮のおと

鳥さしも手際見せけり梅林

から傘に柳を分るいほり哉

銭湯も浅香の沼の六日かな

鉞に氷を砕くあつさかな

物部に返事のをそき暑哉

こひ移る蟬の羽赤きあつさ哉

御祓して各く包む袴かな

立秋

先一葉秋に捨たるうちは哉

七夕

空に二ツはしきもの有り機道具

人有や暴風の中を飛ふ筵

いなつまや夜と晝との田一枚

旅人にかしてうたるるきぬた哉

臺笠も立傘も有り作り菽

柳畠やけろりと二本休みとし

鶴の子の額ハ赤き梢かな

霜葉紅於二月花

もみち折る人や車の酔さまし

歳暮

ちよと鳴けとしくれ竹の庭雀

讀王充論衡

わか草や鶴の蹈たる跡は皆

初子の日長浦といふ所にて

松真木も引けや若菜の餕(茹)加減

乙鳥の棚うちつけよ花のやと

是歳文化丙寅春二月二十九日晋子の百年忌たるにより肖像百幅を畫き上に一句を題して人々にまみらせける又追福の一句をなす

囀れや魔佛一如の花もしろ

田から田に降ゆく雨の蛙かな

護田鳥の鳴く木屋か置場や宵の月

剖葦や燈火もるゝ夜の川

鶯の栖む其木末とは柏餅

さきのぼる葵の花や段階子

初幟を祝ひて

犗を餌に釣上たりな吹なかし

やよ水雞さいたる門を敲くは

巨園八十賀に 巨字不明

突ふるせ神の切けん此藜

賣藥か黒き扇の暑かな

かみきぬた

百舌のなく木末は昏て十三夜

駒宮如岡を悼て

露霜よ手を合たる紅葉哉

箕輪石川侯口切出し給ふ

ときゝて

軒よけふはこひ手前の時雨哉

歳暮

鷹の栖む山ハ霞むうとし木樵

卯春興

鴨のりて氷なかるゝ春日かな

鎌田の梅見にまかりて

萬歳を居並て待つ田舎哉

はつ牛午や志るし計を揚豆腐

芹摘みに出て孫もるす彦も留主

文化丁卯春當流の宗義

積年の惑乱悉く

御裁断有て二月十八日築地

御坊に召れ關東三十三ケ國の

御末寺各御教受有り

本如上人の御德義四海にあ

ふれ誠に鳥鷺ぬといへるも

今此時也

うくひすに御堂の敷静也

金澤の汐干に

經緯の潮カや蜊の縞このみ

漢土楊子江

日本隅田川

茶の水に花の影くめ渡し守

甲子の大黒天を畫て

月花もいさうち出さん小槌より

元木の彌陀に詣るとて

御影供の團子も花も降る日かな

卯月の八日よ

珍敷ひものか咲ますす垣根かな

今ひと聲答る山のやほとゝきす

落る音ふとすおと有り園の梅

乞巧奠

袖ふるは廊の屋根や星の竹

牛牽て川越す人や星の宵

堀川院の御時よりとて

虫撰聲なきは皆うつくしき

笠脱てみな持せけり萩もとり

馬市の借屋よ一と夜秋の月

雲の飛のときれゝ月のみなと哉

啄木鳥みねのあらしや谷の聲

つる引けは遥よ遠しかゝす瓜

秋雨や筏の床の夕けふり

燕の残りて一羽九月盡

から傘を返せいはもとの時雨哉

達广忌や朴の落葉の皆片し

後 鷹犬の縄よ引るゝ枯野かな

前 遠山よ赤き宮あり冬そ木たち

時頼の寐酒を笑へみとさゝゐ

枯葉ゆく葱の小川や牛の繪馬

かみ置や男の肩よこほれうめ
粥一ッくうや不喰や鉢たゝき
鶉のひと足ぬきや冬の川

歳暮

いせや伊勢今としも賣らす鏡研
(往)注連ないか餅さしくへつ庭竈

春興

見て笑へ若菜の(菜)葉よ天下筋
師遠か苔をひくやけふの松

墨子悲絲

そめやすき人の心やいとさくら

錢突て花よ別るゝ出茶屋かな
かね撞ぬ(撞)鐘樓有けり夕さくら

瑞麟寺をよきる

ゆきとのみいろはに櫻ちりぬるを
ほろ蝌の山かけ忍へほとゝきす
一二丁先をゆく帆や麥の浪
山寒し瀧より下の蟬の聲
初茸や廻さは獨樂よますゝるへく
屑買ひの吹れて歩行野分哉
海山と名の立分る角力かな
秋雨やそれへ降る鳩晴る鳩

東陽精舎にまかりて

地に敷や佛の場の天竺花

はつ雁やはつかの闇の聲ハ月

彝具判者披露　彝字不明

隠家は同しはちすの垣根かな

名月や洋に見なれぬ獣あり

芥川わたるところ繪たるに

抱かれたり負たり風の萩すゝき

いきたなき隣も盲を飼うつら

橋千蔭身まかりける

断琴の友なりけれハ

から錦やまとにも見ぬ鳥の跡

吾畫る菊に讃なしかた月見

山茶花や根岸尋る華文菖

しくるゝハ鷺の羽影や冬の海

きぬ〳〵のふくら雀や袖頭巾

神名川に旅寐して

さま〳〵の鳥を千鳥と闇夜かな

和田海の底もにしきや冬さかな

歳暮

我かとに松買替せ馬やとし儲

市人の天狗礫や土のかね

春興

難波津の習ひ始やうめの花

うくひすの遅音笑ふや垣の梅

初午や二ッ瓶子の黒羽たり

二月二十五日 鞠塢か庭の

菅廟にてはゐかいのもよふ

しける

一順をつけよ蛙もうくゐきも

花見ても依怙ある人のこゝろ哉

畠うちのよくも反る也老ぅ身と

己巳四月江の島辨才天三社

惣開帳有ける時

扇まて扉ひらくや狂言師

八寿よ明るき麥の田一枚

かさゝきの橋場を渡れ星迎

いなつまや志はし明るき椎ヶ本

名月や筆法居士か霧の不二

車井の音や雲井の渡り鶴

小夜千鳥また寐ぬ舩の咄聲

水鳥や行あたりては右左

花ぬふとり

己巳の冬居藤塚といふ
ところようつして

取遺りもをかしき村の歳暮哉

節季候は百囀のはしめかな

元日の朝寐起すや小田の鶴

うめ守よ硯借れハ筆もなし

山蔭の梅また寒し活大根

うくゐすや梅よ氷れる枝もなし

梅を縫ふ糸ならなくよ春の雨

桃洞よ送る　前書有畧

この道の手綱ゆるきや春の駒

朝三いつのとしか予と京師よ遊ふとし又心牛よいさなはれて花洛よをもむくその餞して

當て來よ大和路かけて二の替り

鳥一ツ梭を投たりいとさくら

讀仙經

朝〱の洗ひ流しや蜂よ成れ

小田返す初いなつまや鍬の先

人麿忌

ちる花やあまきる雪の鍋鑄かけ

文臺之銘　前書畧

しら魚や是も居杭の橋柱

花よ飽て机よねむる胡蝶哉

佛生會

生れ出てうき世の花の一御堂

なま鯛や先綿をぬけ更衣

たゝかすよ水雞の入や戸なし庵

竹醉日

よひさめて竹もる月や十三夜

ゆふ立の今降るかゝや鷺一羽

山梔子の花を相手や世捨いは

七夕

かさゝきとけふハ呼るゝ鴉かな

晝寐して晩待星を顔よ笘

十三夜

熱燗をふくや後の月の松

店賃のかりも結はす九月蜩

野州旅行

問ひ來かし榎の紅葉地藏堂

山川のいまたなやまめや散もみち

未

春興

今朝解くや氷のわり菜霜の梅

鶴鸛の來て豆煮ゑとや二日灸

三冬雪なし睦月十七日雪
ふる

刈らてけふ雪待つけぬ庭の荻

鳥追の足袋の白さや川向ひ

人の氣のほころひ初つもつ櫻

干海苔よ小海老見付て哀也

をきふしも竹の自在や梅花

榎見へ白壁見へてかすみ哉

苻責れてさみしき鷺の栖哉

初燕くるふにふなり袖袂

江戸節一曲をきゝて

紫陽花や田の字盡しの濡ゆかた

ほとゝぎすなくや有馬の火見番

毛蟲今蜘蛛のふるまひ杜宇

ほとゝぎす猪牙の布團の朝しめり

住吉をどりの畫の讃に

ふけや此すみよしの風うちはより

魚一ツ花野の中の水溜り

百舌鳥の尾のふる里寒し稲ほつち

鼠とる猫鳥捕る鷹みな

これ世上のありさまなり

草の戸に蝿虎をなかめけり

宇治の里一見の時

いな妻や二度にミせたる寺と橋

葉月十五夜

寒光洞にて

十六宵も獅子の氣遣りか廓の月

名月に御歌所も覗きたし

藤澤にて

人知らてうけらの花の盛りかな

榎島法樂

すけ笠の月と時雨や山ふたつ

うめの立枝

客舩よ入日残して時雨かな

傘はまた時雨る音や星月夜

からくと日本堤の落葉かな

至日

今日よりして春の歩行や日の鵜

歳暮

餅花や柳さくらを一木まて

大名ハ鶡鵯に似たりとしのくれ

壬申春興

梅わか菜皆よしくや庵の春

うくひすの舌うちしたり花の味

紅梅や今朝ハまた來ぬ白すゝめ

人日

ほ（ふ）るとしのふる衆（名）ハ呼ぬ鈴菜哉

うくひすや今谷を出て身つくろひ

む月十七日杉田にあそひて

解き舟の橋を境やうめの華

これハ〳〵爰をや梅のよしの山

上巳

居候夜着の洞着て桃のはな

すみたかはの花見にゆきて

遲りやいかに張良朝さくら

蜘の圍に暫く花も舞ふ小蝶

苗賣りに初音問はやほとゝきす

圓覺寺にまかりて

鐘凉し女の力聞へけり

權田坂といふ處にて

ほとゝきす楓花咲く山路かな

維摩經をよみて

解脱して魔界崩るゝ芥子の花

青梅（樓）草市

市分てもの言ふ花やをみなへし

新蕎麦や一とふね秋の湊入り
はつ茸や蒼計りの小むらさき
啼く山の姿も見へすつ夜の夜
良夜
名月や何よ似たるそ鍋の蓋
炮焙よ何ふをふるそ秋の雨
趁浪を追かけて刈るあとき哉
鱸
鰤魚釣りや蒼海原の田うへ笠
みねとなり渚と成るや秋の雲
山紅葉照るや二王の口の中
又もみち赤き木間の宮居かな

みの虫や啼ねハさミし鳴はくも又
帰去来
帰なむ居酒一と口菊寂ぬ
古田高麗の茶盌盌を畫よ
うつし其上よ讃しておく
るとて
幾時雨ふるやふる田のかたみ哉
東叡山の清水よ
如意輪の頬杖したる落葉かな
水却て炭を計るやかたし貝
石蕗の日蔭は寒し猫の鼻

寺島梅幸が藏せる塩鮏の幅に此賛あり

獺罠の崩れ次第や冬の川

歳暮

塩魚よ正月ちかき日さしかな

いさ珠を拾はんとしの浦傳ひ

跋

覃識抱一隱君蓋三十有餘年。隱君之操終始如一。性好誹諧。善圖畫。覃雖不知誹諧者。觀其畫之日進。而又知諧語之韵響中宮商矣。古云。詩有聲畫。畫無聲詩。隱君之思。有以有聲發者。有以無聲發者。有無不遺。亦何自在也。宜乎辞朱門而處白屋。舍熏灼而就閑曠也。屠龍之技。可以消日矣。若夫庖丁之刀。目無全牛。陳平之肉。宰割天下。果何益矣。龍乎〻〻。屠而獲珠。如覃俗吏。希其鱗爪。亦不可得已。

文化癸酉清明後日南畝覃書于緇林樓中

（南畝）

明治三十一年十二月二十六日午夜一校畢

觀潮樓主人

[illegible]